

元児童の絵が
工場でお出迎え
じゃがいも農家に喜びも

北陽小学校の閉校時には16人の児童がいた。「母校がなくなってしまう子どもたちにさみしい思いをさせたくない」と気遣う福太郎は、さらに新しい提案で子どもたちを喜ばせた。

それは児童全員に学校やまちのことを思いながら自由に絵に描いてもらうこと。その原画にデザイナーが色をのせ、新工場に飾るというアイデアだった。校舎そのものを描いた子もいれば、大好きなスケート靴や小清水町のおいしい野菜を描いたり、思い思いの愛情に彩られた16枚の絵が出来上がった。

記者発表から1年5カ月後の2013（平成25）年7月27日、福太郎（株）小清水北陽工場が完成、「感謝の集い」が行われた。新商品「ほがじゃ」のお披露目と同時に

同名のPRキャラクターも登場し、新しいスタートを盛り上げた。

参加者の中には親子二代にわたって北陽小学校に通ったというじゃがいも生産者の鈴木隆志さん一家もいた。長男の優太君は最後の在校生のひとり、閉校後は町内の小学校6校を再編した小清水小学校に通ったが、放課後や土日になると自然と足が向かう先は旧母校だった。

というのも、学校以外の遊び場が欲しい子どもたちに福太郎は「いつでも来てほしい」と工場を開放。工場見学に訪れる観光客と地元の子どもたちとちがひとつ屋根の下にいる、温かい空間が出来上がった。

父親の隆志さんにも「ほがじゃ」誕生以降、大きな心境の変化が訪れた。「じゃがいも農家である僕らは、これまでまちのでんぷん工場にじゃがいもを納品したらそれで終わり。その先、自分たちが作ったものがどん

な形になって、どんな人たちが口にするのかを想像することもできませんでした。それが福太郎さんの進出で『ほがじゃ』という目に見える形になり、自分たちも食べられるようになった。小清水の土産としてどこにでも持って行けるし、必ず『おいしい』といってもらえる。子どもたちも、うちで採れたじゃがいもが使われていることはわかっていきます。うちの自慢であり、ま

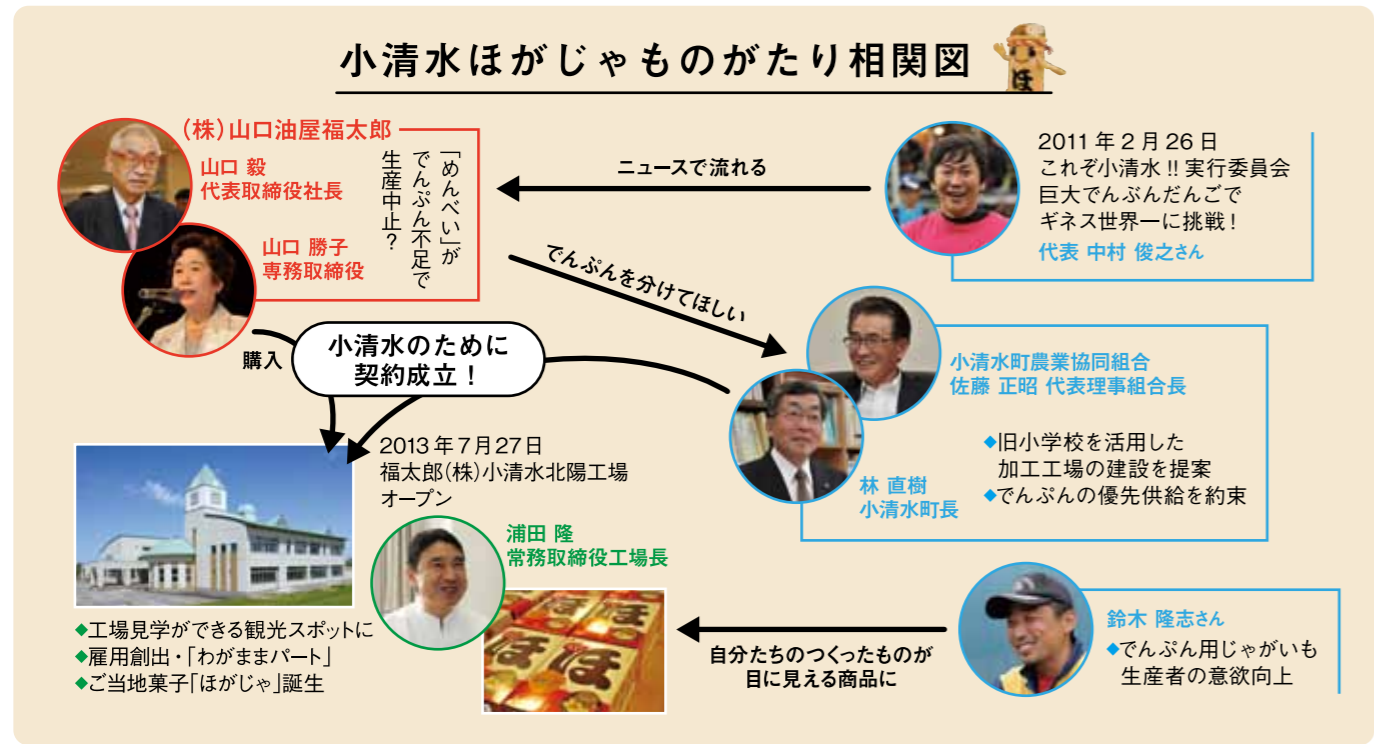
ちの自慢のほがじゃです」「よりいいものを作りたいという意識が高まった」というじゃがいも生産者共通の思いを代弁してくれた。

10.11.12.子どもたちが描いた原画にデザイナーが着色。見学者の目を楽しませている。
13.「感謝の集い」では福太郎から子どもたちに額装された絵が進呈された。
14.工場の一面には在りし日同様、子どもたちの遊ぶ姿が。通い慣れた空間に皆の表情もリラックス。

いつ来ても
いつ帰ってもいい
「わがままパート」を起用

2015年（平成27）現在、小清水北陽工場では40人が勤務。うち半数近くが小清水町民で、残りは網走や斜里などの近隣から通っている。空港や駅など全道の土産店で販売されている「ほがじゃ」の売れ行きは好調。工場の人手不足を補うために浦田工場長は自ら発案した「わがままパート」の募集を始めた。

「お子さんが就学前の若いおかあさん向けに《いつ来てもいい、いつ帰ってもいい》働き方を作りました。たとえば昼休みの1時間、従来は完全に止めていたラインを少しでも動かすことで驚くほど生産性が上がることがわかりました。《いまは1時間しか働けなくてもお子さんが大きくなったらいつでも待っていますよ》と話す、皆さん喜んでくれます。現在わがまま



パートさんは8人います」

「めんべい」と「ほがじゃ」の2種類を作り続けることで工場は年間売上高10億円の黒字ラインを超えることができる。地域貢献を可能にするためにも安定した事業継続は企業の使命。冬、大雪による出荷遅れの可能性も視野に入れ、包装のバリア性を高めるなどして賞味期限を4カ月から半年まで延ばしたのも、早めの自衛策の一例である。

足踏みしない、迷わない
前進する小清水の人々

郷土の味から始まった《小清水ほがじゃものがたり》は、林町長の言葉どおり「何かがひとつ欠けても実現しなかった」。もし、これぞ小清水!! 実行委員会のメンバーが巨大でんぷんだんごでギネスに挑戦しなかったら。もし、福太郎の山口社長に佐藤組合長が「小学校を見て行きませんか」と提案しなかったら...

出会ったパートナー企業にも恵まれた。事業同様に地域貢献を重視する山口社長と、

母校がなくなる子どもたちのさみしさをやさしく包んでくれた勝子専務、浦田工場長たちの心づくしに、まちと福太郎はひとつになった。旧北陽小学校は「ほがじゃ」の工場になり、小清水町の誇りになった。「ほがじゃ」は友達、そう語る子どもたちの未来に向かって福太郎の小清水北陽工場は今日も元気に稼働中である。

福太郎株式会社
小清水北陽工場
小清水町字浜小清水 304 番地 1
TEL 0152・63・4141

